

初のハンゲル検定試験

に応募者が殺到

韓国・朝鮮語ブームのなか、六月二十七日に行われる「『ハンゲル』能力検定試験」には主催者の予想をはるかに上回る約二千人が応募し、ハンゲル学習者のすそ野の広さを浮き彫りにした。



7の準備風景

韓国・朝鮮語を学ぶ人は年々増え続け、授業を持つ大学は約百校に上る。しかし、これまで検定試験は運輸省が実施する通訳ガイド試験だけ。

このため韓国・朝鮮語教育の第一人者である東京外国語大学の梅田博之教授が会長となり、「ハンゲル」能力検定協会を設立した。

クラスがある。同協会の康順益常務理事は「韓国・朝鮮問題は、言葉から入るのがいちばん常識的だと思う」と検定試験の意義を強調する。

● 上は八十歳、下は十一歳の小学生

とはいえ、初めての試みにはスタッフの苦労も多かった。多い日には一本しかない回線に二百本の電話が集中。「何級を受けたいのか」といった私的な相談から、「私は何年から何年まで朝鮮半島のどこどこ

延と話したがるお年寄りまでいたという。

また、「女性との交渉のやり方だけ教えてくれ」「買い物に必要な会話を」という見当違いの問い合わせも。応募者の中には、十一歳の小学生や八十歳の男性もいるという。

こうした盛況ぶりについて梅田会長は「これまで外国語学習といえば、英語など欧米の言葉に限られていたが、外国語に対する関心も多様化している。日本に最も近い国の言葉を勉強しなくてはという認識が高まったのだろう」と指摘している。

次回の試験は十一月十四日の予定。問い合わせは〒181 東京都渋谷区本町三の三二の一の二〇三「ハンゲル」能力検定協会とろろが多い、というのが現状。西山助教授らの実験のポイントもここにある。

これまでに原理とカンを頼りかかなりの試作品を作ったが、思ったように飛行するのは五個に一個ぐらいの割合。いまのところ、すべてが手探りの状態だ。

ブーメランはここ数年、アウトドア競技として見直されており、全国的には「日本ブーメラン協会」が発足、レジャーとしての輪も広がっている。一九八八年からは、国際的な大会も開かれており、来年八月には、神奈川県に、各国からのブーメランファンが集合し、腕を競うことになっている。西山助教授らの実験の結果が、こうした競技などにどう反映されるのか、関係者も注目している。

白岩 淳一・大阪支社

挑む大学研究会 ブーメランのなぞぞい

「オーストラリアのアポリジニーが使うブーメランはなぜUターンしてくるのか」。こんな素朴な疑問を力学的に解明しよう

と、大阪経済大学(大阪市東淀川区)の西山豊助教授(四)が試行錯誤を繰り返している。

室内で紙製のブーメランを飛ばしたのが発端。これに興味を持った学生が加わり「ブーメラン研究会」を発足させた。週に二、三回、淀川の河川敷で、一日中、飛行実験を続けている。

この試みは、西山助教授が、ブーメランの飛行軌跡を数理的に解析するテーマをゼミで取り上げよう、と教



これが「スローイング」の基本パターン?

● 原理は分かるが課題の「応用面」

基本原理が説明され、飛行軌跡のメカニズムは「定式化」できても、その逆、つまり、どのようなブーメランをどう作れば、具体的な動きはどうなるか、という「応用問題」では分からない